

講演会「水辺林の役割と再生」

(石川慎吾名誉教授、仁淀川の“緑と清流”を再生する会)

令和7年7月5日（土）、仁淀川町池川コミュニティセンターにて、高知大学名誉教授の石川慎吾先生による「水辺林の役割と再生」をテーマにした講演会が開催されました。

石川先生は、仁淀川清流保全推進協議会の「川本来の生態系を取り戻すワーキング」のメンバーとしても活動されており、今回はワーキングメンバーとしてもご協力いただき、講師を快くお引き受けいただきました。

講演の前半では、沖積錐（ちゅうせきすい）や崖錐（がいすい）といった地形ごとの特徴についての解説がありました。地形は水の流れや植生に大きく関わっており、水辺環境を理解する上での基本となる知識として紹介されました。

続いて、溪畔林（けいはんりん）についての説明があり、「溪畔林とは何か？」を次の3つの視点から捉えることができるとのことでした。一つ目は種組成の違いで、冷温帯と暖温帯では生育する森林の種類が異なるという点。二つ目は、河川からの影響を受けても成立する森林であること。洪水や水位変動などにさらされながらも、それに適応した植生が見られるのが特徴です。三つ目は、溪畔林が河川に与える影響で、生態系全体にとって重要な役割を担っていることが示されました。

さらに、水辺林が持つ生態学的な機能についても詳しい解説がありました。たとえば、洪水時には土砂や栄養塩類の流入を和らげる緩衝帯の役割を果たすことや、木々が日射を遮ることで水温の急激な変化を防ぎ、安定した水環境を保つこと。森林から落ちる落葉や落枝（いわゆるリター）は、水生昆虫にとって重要な栄養源となり、それがまた魚類の食物連鎖を支えます。こうしたリターの供給によって、川の中の水生生物の生態場が形成され、多様な生き物のすみかが保たれています。

また、水辺林は周囲の陸と水域をつなぐ役割も果たしており、さまざまな生物の移動を可能にすることで、生物の分布や遺伝的な交流のネットワークも支えています。つまり、水辺林は川と陸をつなぐ重要な「生命の回廊」としての機能を持っているのです。

講演の終盤では、魚にとって陸生昆虫が重要な餌資源であるという話にも触れられました。そのため、リターを豊かに供給する落葉広葉樹の存在が、水辺の生態系を維持する上で大切であることが強調されました。

しかし、水辺林の中には、急速に成長するアカメガシワやヌルデといった木が増えすぎてしまうことで、他の植生や水辺環境に悪影響を及ぼす例も見られます。こうした問題に対しては、「まずは管理がしやすい場所から少しずつ始め、持続的に見ていくことが大切」と、石川先生からアドバイスがありました。

今回の講演は、自然環境の再生に必要な知識を深めるだけでなく、私たちが地域でどのように自然と向き合っていくべきかを考える、たいへん有意義な学びの時間となりました。

